



TITLE:

京大広報 No. 673

AUTHOR(S):

京都大学総務部広報課

---

CITATION:

京都大学総務部広報課. 京大広報 No. 673. 京大広報 2011, 673: 3535-3556

ISSUE DATE:

2011-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196407>

RIGHT:



# 京大広報

No. 673

2011.12



第6回京都大学ホームカミングデイ  
—関連記事 本文3539ページ—

## 目次

図書館機構の使命と課題 副理事・図書館機構長 林 信夫	3536
〈大学の動き〉	
皇太子殿下の iPS 細胞研究所ご視察	3538
平成24年度大学入学選抜大学入試センター 試験の実施	3538
第6回京都大学ホームカミングデイを開催	3539
〈部局の動き〉	
先端技術グローバルリーダー養成プログラム 第五期生修了式を開催	3540
生存圏研究所が宮崎県木材利用技術センター と連携・協力に関する協定を締結	3540
生態学研究センター創設20周年記念式典を 挙行	3541
〈寸言〉	
キャンパスを再訪して考えたこと 塚本 隆史	3542
〈随想〉	
飛躍のとき 名誉教授 森澤 眞輔	3543
〈洛書〉	
数学研究の楽しみ 入谷 寛	3544
〈栄誉〉	
柳田充弘名誉教授が文化勲章を受章	3545

玉尾皓平名誉教授が文化功労者に選ばれる	3545
伊藤邦武文学研究科教授、丸岡啓二理学研究科 教授が紫綬褒章を受章	3546
〈話題〉	
第2回京都大学風景写真コンテスト表彰式を 開催	3548
学術情報メディアセンターシンポジウム 「これからの大学 ICT マネジメントモデル」 を開催	3550
国際交流会館おうばく分館で消防訓練を実施	3551
宇治キャンパスでリサイクルフェア・交流会を 開催	3551
北京交通大学一行が工学研究科を訪問	3552
「女子高生・車座フォーラム2011」を開催	3552
経営管理大学院が「第4回サービス・イノベー ション国際シンポジウム」を開催	3553
京都大学の講義を Apple「iTunes U」にて 無料配信	3554
社寺見学会を実施	3555
〈計報〉	3555

京都大学総務部広報課

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

## 図書館機構の使命と課題

副理事・図書館機構長 林 信夫

### はじめに

今年度4月から、「京都大学における全学の図書館機能に関する規程」第5条第2項に基づき総長より図書館機構長に指名され、同3項により附属図書館長を兼務することになりました林と申します。どうぞ、よろしくお願いします。



### 1. 組織

図書館機構は、平成17年度の立ち上げ以来、世界最高水準の教育研究拠点に相応しい学術情報基盤としての役割を担うべく、附属図書館と全学の約50の部局図書館・室の連携を図る組織として活動しています。そのことをより明確に内外に示すために、今年度前期の図書館協議会の議論を経て10月の部局長会議と教育研究評議会に「京都大学における全学の図書館機能に関する規程」の改正を提案してその承認を受け、今般その名称も「京都大学図書館機構規程」と変更して、新たな一步を踏み出したところです。その結果、図書館機構が附属図書館と部局図書館・室から構成されることが、より明瞭になりました。周知のように、大学設置基準では大学に図書館を置くこと(第36条第1項)とされ、その限りでは大学の「附属図書館」は組織的にはひとつで、それを現実にも総合(または中央)図書館+分館として制度化している大学もあります。また、東京大学のように、総合図書館(いわゆる附属図書館)と部局の図書館から「附属図書館」が構成されとする大学もあります。なお、単科大学等規模の小さい大学には、附属図書館を情報その他の組織と一緒にして、たとえばメ

ディアセンターとして組織化するところもあるようです。それに対し、今までの京都大学の状況は、外からみるとバラバラで極めてわかりにくいとの声を仄聞することがありましたが、今回の改正により外から見てわかりやすい組織になったのではないかと考えているところです。

### 2. 使命

図書館機構は、京都大学構成員の教育研究活動を支援し、人類の知的資産である学術情報資源を収集・整理・保存し、また保有情報を社会に発信するために、物的側面でも人的側面でも作業の実施・継続・向上を図っています。

1) 物的側面 — 【学術情報資源】学術情報資源は、今や紙媒体だけでなく、電子媒体からも成っていることは周知ですが、その安定的提供のためには予算確保が重要になります。特に電子ジャーナル経費については、今や教育研究活動に不可欠であるとの認識に立って、全学的観点からその経費分担につき図書館協議会において議論し調整を図っているところです。電子ジャーナルは、有料分として現在28,000タイトル、オープンアクセスジャーナルを含めると60,000タイトルを優に超え、平成19年度に比較すると倍以上になっています。しかし、後述のように、電子ジャーナルの契約金額は年々値上がりが続いていますので、いかにそれに対応して安定的に供給できる態勢を作り上げるかが重要課題になります。

他方、紙媒体については、利用だけでなくその保存をも図らねばならないことが、電子ジャーナルとは異なった課題に結びつくことになります。たとえば、貴重書を始めとする資料の保存・修復、遡及入力の推進等が、それになります。遡及入力は8割方済みでしたが、残っている130万冊余りは手作業の部分が多くなるため今まで以上に注意と労力を必要とすることになりそうです。

【情報発信】本学においては日々教育研究成果が公表されていますが、その成果を本機構が平成18年に構築した「京都大学学術情報リポジトリ(KURENAI)」において無料公開しています。現在、収録論文数が



平成18年度の37,000件から88,000件へと増加し、アクセス数も61万件から114万件へと順調に伸びており、ダウンロード件数をみても、昨年度で121万件を超えています。このような活動状況に対し、世界的な機関であるスペイン高等科学研究院により、今年7月に「機関リポジトリ・ランキング国内1位、世界8位」の評価を受けることができました。この評価は、京都大学が日々生みだしている教育研究の成果に対する社会からの関心の高さを物語っているものといえます。これもひとえに本学構成員の教育研究活動の賜といえましょう。

2) 人的側面 — 【能力開発・研修】図書系の職員は、附属図書館だけでなく、全学の部局図書館・室にも配置されておりますが、後者の職員は、現組織上、各部局に所属していることは明かです。しかし、他方で、京都大学の図書館・室が全体として教育研究活動を支える学術情報を提供し続け、さらにその質量ともに向上させるためには、図書系職員の力量にバラツキがあることを避けねばなりません。その維持・向上を、図書館機構が中心となって全学的観点から図っており、今後も続ける必要があります。その一環として毎年研修や講演会を開催し、昨年度は研修を8回、講演・講習会を3回開催しました。この他に、近畿地区を中心とした研修・講演会の主催をすることもあります。

【リテラシー教育】また、利用者支援の一環としてリテラシー教育も担っております。具体例は、全学共通科目「情報探索入門」のサポート、学生への各種講習会開催です。

### 3. 課題

以上のように、現行の制度枠組みの中で全学的観点からの学術情報基盤として役割を果たすために、図書館協議会における議論を経て、学術情報資源・サービスを含む学習研究環境の向上、知的成果の発信、知的資産の保存・管理やそれらを支える人的資源・組織の整備等に、全学を見据えながら取り組んでいるところから、自ずと課題も生じています。

1) 電子ジャーナル — 電子ジャーナルの契約金は1年前に決まるところに特徴がありますが、本

学では、契約金のうち約半額を全学の基盤強化経費から支出し、残額を各部局で分担する方式をとっております。その分担方法について、昨年度新たな方式によることを図書館協議会での議論を経て部局長会議において了承され、それに基づく新たな算定額が本年11月15日の部局長会議で報告されたところであります。しかし、契約金額が年々上昇している現在、今のままでの方法に従い続けると、部局分担額が増大し続けるだけでなく、利用を制限する動きも出かねず、電子ジャーナル利用にとっては本末転倒な状況が生まれるかもしれません。価格上昇を年平均6%と想定した場合、平成27年度には現在の1.5倍にふくれあがり、負担能力を超える部局が出てくる可能性があります。この問題に対処するためには、すでに全国の国公私立の大学図書館の交渉団体としてこの4月に立ち上がったコンソーシアムの動向や、基盤強化経費のあり方等真剣に議論を深める必要があります。

2) 保存書庫 — 学術情報の中に占める電子媒体の割合が高まっているとはいいながら、紙媒体の持つ意味が依然として高い分野がありますから、図書館は、学術情報を収集保存して提供するだけに止まらず、人類の知的財産として次世代に伝承する作業にも携わらねばなりません。そのためには、本学の図書収納力の拡大を図る必要があります。大学全体としては、今年度はじめて実効的収納力は99%となっており、部局図書館によってはすでに100%を超えているところがあります。今後も各部局において収納力増強ができない状況が続きますと、今年度末には実効的収納力が100%を超えると予測されます。財政状況の厳しい中、いかに対応するかの議論を始めねばなりません。

### おわりに

以上のように、図書館機構は、附属図書館による事務的支えによりながら、全学的観点に立って、より良い教育研究環境整備を図ることに尽力しておりますので、是非とも皆様のご理解、ご協力を賜うことができればと考えております。

## 大学の動き

### 皇太子殿下の iPS 細胞研究所ご視察

皇太子殿下は、10月29日(土)、第26回国民文化祭・京都2011へのご臨場にあわせて、iPS細胞研究所をご視察された。

皇太子殿下は、山中伸弥iPS細胞研究所長の案内により、会場となったiPS細胞研究所玄関で中川正春文部科学大臣や松本 紘総長らの出迎えを受けられた後、山中所長より、1階ギャラリーにてパネルによるiPS細胞研究の概要説明を受けられた。

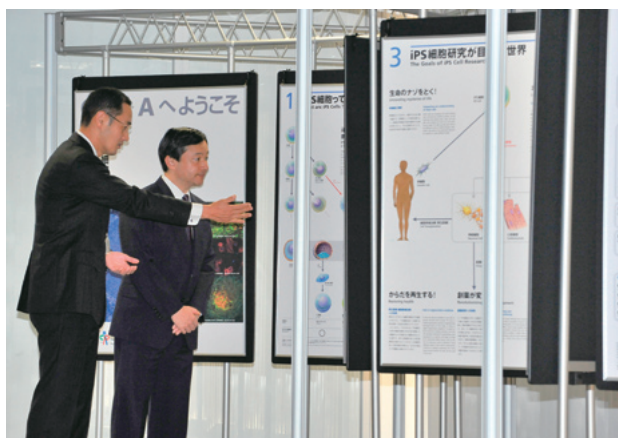
次に、2階では細胞調製施設の説明と細胞調製の作業現場をご視察され、木村貴文iPS細胞研究所教授の案内により、24時間の監視体制の他、管理室の

モニターから細胞調製室内での作業の様子をご覧になられた。

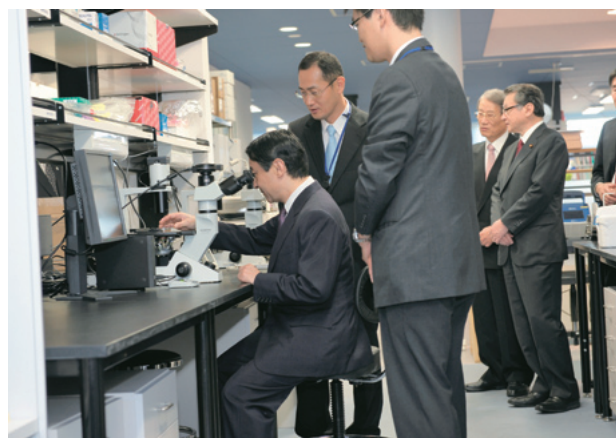
その後、3階遺伝子解析室にて最新の研究機器等をご視察になり、山本拓也iPS細胞研究所助教が、現在の研究の進展や機器の進歩についてご説明した。

最後に5階オープンラボスペースにおいて、吉田善紀iPS細胞研究所講師の案内で、3種類の心筋細胞の拍動の様子を電子顕微鏡で実際にご覧になられた。

その後、殿下のお声かけにより、若手研究者等との懇談の場が持たれ、4名の若手研究者等が自身の専門分野等についてご説明した。



山中所長より説明を受けられる皇太子殿下



顕微鏡で心筋細胞をご覧になる皇太子殿下

(総務部)

### 平成24年度大学入学者選抜大学入試センター試験の実施

平成24年度大学入学者選抜大学入試センター試験は、平成24年1月14日(土)および15日(日)の両日に実施される。試験の概要は、次のとおりである。

#### 1. 実施期日および試験教科等

1月14日(土)

〔地理歴史、公民〕、国語、外国語【筆記】、  
【リスニング】(英語のみ)

1月15日(日)

理科、数学①、数学②

#### 2. 試験場および志願者数

第1試験場(本部構内)

第2試験場(本部構内)

第3試験場(吉田南構内)

第4試験場(吉田南構内)

第5試験場(吉田南構内)

志願者数 2,082 人

(学務部)



## 第6回京都大学ホームカミングデイを開催

11月12日(土)に「東日本大震災にかかる復興と支援」をテーマとし、「第6回京都大学ホームカミングデイ」を開催し、同窓生(卒業生、元教職員)、教職員、学生など延べ約2300名の参加があった。



挨拶する松本総長

陳素鶯台湾京都大学同窓会理事およびAnchaleeporn Waritswat Lothongkumタイ・京都ユニオンクラブ(KUC)委員からそれぞれ挨拶があった。



講演を行う前原議員



講演を行う福山議員

総会は百周年時計台記念館百周年記念ホールにおいて開催し、京都大学同窓会会長の松本 紘総長から「人と人とのつながり、絆を考える機会としたい」と挨拶があった後、同窓会役員代表として小野木紘一岐阜京都大学同窓会幹事、そして

記念講演会Ⅰでは、満席で立ち見の出る中、前原誠司衆議院議員の「日本の成長戦略と外交・安全保障」および福山哲郎参議院議員の「東日本大震災に向き合って」と題する講演が行われた。その後、台湾同窓会の陳氏と蘇 顕揚氏そしてタイ同窓会のAnchaleeporn氏から、自国におけるそれぞれの災害復興に関する報告があった後、吉川研一理事補・理学研究科教授から「京都大学の東日本大震災後の取り組みについて」と題する講演があった。

続いての記念演奏会では、京都大学吹奏楽団33名による「上を向いて歩こう」などの演奏が行われた。

記念演奏会終了後、国際交流ホールに会場を移し、赤松明彦理事・副学長の挨拶と乾杯の発声で懇親会が開催された。国内外からのOB・OG、そして文化系・体育系クラブをはじめとする多くの学生の参加があり、学生サークルTREVISによるチアリーディングの披露があった。会場が華やかに盛り上がる中、辻 宏樹応援団長のエールに続き、三枝大祐副団長のリードにより、参加者全員で第一応援歌「新生の息吹」を合唱。盛況のうちに懇親会は、閉会となった。

懇親会終了後の記念講演会Ⅱは、満席となった百周年記念ホールにおいて、文化勲章受章者の哲学者、梅原 猛氏の「文明はいかに変わるべきか」と題する講演があった。

他の企画としては、国際交流ホールにおいて「OB・OGと学部学生・大学院学生との交流会」を開催し、若い卒業生と現役学生が就職をテーマに熱心に意見交換した。また、清風荘、尊攘堂および附属図書館の自由見学や第三高等学校関係資料室、文学部陳列館および総合博物館の企画展「埃及考古―ペトリーと濱田が京大エジプト資料に託した夢―」の見学ツアーにも多くの参加者があった。

この他、百周年時計台記念館と楽友会館においても学部学科等同窓会や地域同窓会の講演会、懇親会が開かれ、賑やかな一日となった。

次回は平成24年11月10日(土)に開催を予定。

同窓生のみならず、教職員、学生そして家族の方々の参加を期待している。



講演を行う梅原氏



エールを送る辻応援団長と懇親会場の様子

(渉外部)

## 部局の動き

## 先端技術グローバルリーダー養成プログラム第五期生修了式を開催

9月29日(木)、桂キャンパスBクラスター桂ラウンジにて、先端技術グローバルリーダー(GL)養成プログラム第五期生(8名)の修了式を開催した。

同プログラムは、博士学位取得直後の研究者および博士学位取得のための研究がほぼ終了している博士後期課程大学院生を研究員又はRA(リサーチ・アシスタント)として雇用し、深い専門性に加えて幅広い識見も備えた国際的な研究リーダー人材を養成することを目指しており、科学技術振興機構の支援を受けて工学研究科と薬学研究科が連携して平成20年度から実施している。養成対象者は半期ごとに募集され、養成期間は1年間である。第五期生は、平成22年10月から同プログラムが提供する双方向教育型共同研究、産官学交流塾、実践英語教育、知財教育に取り組み、この度、晴れて修了を迎えることになった。

修了式は、双方向教育型共同研究および産官学交

流塾に協力いただいている連携企業・機関の方々にも列席いただき、和やかに執り行われた。連携企業・機関からの来賓として、元島津製作所の日根野正和氏による祝辞の後、長谷部伸治GL養成ユニット長から、第五期生に修了証書が授与された。

第五期生の挨拶では、「産官学交流塾や実践英語教育での発表を通して、プレゼンテーション力が向上した」、「双方向教育型共同研究や産官学交流塾では、異分野の研究や研究者との交流を持つことができ、視野が広がった」、「双方向教育型共同研究を行ったことで、決められた期間内にどのように研究を進めていくかというマネジメント力の必要性を強く認識できた」、また、「同年代の研究者と交流できたことは今後の研究活動においても有意義であった」など本プログラム履修に関する感想が述べられた。

なお、同プログラムの詳細・募集要項については、<http://www.ugl.kyoto-u.ac.jp/>で公開している。



長谷部ユニット長による修了証書授与



第五期生修了式の集合写真

(先端技術グローバルリーダー養成ユニット)

## 生存圏研究所が宮崎県木材利用技術センターと連携・協力に関する協定を締結

生存圏研究所は、10月20日(木)に宮崎県木材利用技術センターと連携・協力に関する協定を締結した。津田敏隆生存圏研究所長、小松幸平教授が宮崎県都市にある同県木材利用技術センターを訪れ、津田所長と飯村 豊同センター所長が、小松教授、増永保彦同センター企画管理課長の立ち会いのもと、連携・協力に関する協定書に署名し協定を締結した。

調印の後、両者は今後の連携・協力について話し合い、さらに飯村所長等の案内で同センター内の主要施設を見学した。

同センターは、宮崎県内に生育するスギ人工林材の有効利用研究を進め、地域木材関連産業の技術の向上、木材需要拡大につながる新技術・新製品開発に努め、木材関連産業の活性化、それによる山村と林業の再生に寄与することを目的に2001年に設立された。木材利用系研究機関の中では屈指の設備を備え、化学的分野の研究から木質構造の開発に至るまで、幅広い研究を展開している。

一方、生存圏研究所は、人類の生存基盤となる領域を宇宙圏、大気圏から森林圏、さらには生活圏が



結合した「生存圏」として捉え、人が自然界と相互作用しつつ持続発展可能な社会を構築していくための基礎となる科学技術の振興を図っている。

今回の協定は、特に森林圏から生活圏の分野に関連する課題、たとえば、火山あるいは県外から運ばれて来る様々な成分が森林圏の空気質や農林産物の成長に及ぼす影響の研究、あるいは木造建築分野における連携と研究協力を進めることなどを目的として締結されたもので、今後は共同研究やシンポジウムの実施、研究者の交流、研究施設・設備の相互利用等を通じて、学術研究の推進を図っていくこととしている。



協定書を交わす津田所長(左)と飯村所長

(生存圏研究所)

## 生態学研究センター創設20周年記念式典を挙行政

生態学研究センターは、11月6日(日)に創設20周年記念式典を芝蘭会館で挙行政した。

当センターは、大正3年に京都帝国大学医科大学附属臨湖実験所として開所され、大正11年に理学部に移管された理学部附属大津臨湖実験所および昭和39年に理学部に設立された理学部附属植物生態研究施設を母体とし、平成3年4月に全国共同利用施設として設置された。

記念式典には学内外の関係者ら約百名が出席し、椿 宜高センター長が式辞を述べ、松本 紘総長が本学を代表して挨拶した後、澤川和宏文部科学省研究振興局学術機関課長から祝辞が述べられた。

続いて、当センターと関係の深い、立本成文人間文化研究機構総合地球環境学研究所長、沼田英治理学研究科教授(理学研究科長の代理)および津田敏隆生存圏研究所長からも、それぞれ機関連携、協力講座、学内連携の現状と展望に言及しながら祝辞が述べられた。

式典に続いて、記念講演会が開催され、川那部浩哉名誉教授(初代生態学研究センター長)、中静 透



式辞を述べる椿センター長



挨拶する松本総長

東北大学教授・日本生態学会長、松沢哲郎霊長類研究所長および椿センター長から、それぞれ当センター創設期の思い出、生態学会との協力関係、共同利用・共同研究拠点としての責務、当センターの今後の活動方針などについて講演があった。



講演を行う川那部名誉教授

また、記念講演会後には祝賀会が開催され、和田英太郎名誉教授の挨拶の後、手塚泰彦名誉教授の発声により乾杯が行われた。祝賀会では、開設当時から現在までの懐かしい写真のスライドショーも行われ、学内外の関係者、OB、教職員、学生も交えて歓談が続き、創設20周年を祝った。



祝辞を述べる澤川学術機関課長

(生態学研究センター)



## 寸言

## キャンパスを再訪して考えたこと

塚本 隆史

数年前のことですが、卒業以来三十有余年ぶりに京都大学のキャンパスを訪れる機会がありました。

私の勤務している金融グループが、金融教育を通じた人材育成の一助になればと、京都大学を初め全国の複数の大学に金融に関する寄附講座を設けさせていただいており、その開講に当たりOBとして挨拶をするためにキャンパスを訪れたわけです。

教室には溢れんばかりの学生が詰め掛け、皆、真剣な眼差しで受講しており、質疑の時間では、シラバスや成績評価基準等にかかわる熱心な質問が寄せられていました。私の学生時代は、学生運動が盛んで、入学式がヘルメット姿の運動家たちに「粉碎」され、また学期が始まってからは休講も多かったもので、キャンパス訪問により今の学生生活が授業を中心に回転しているということに改めて気づかされ、今更ながら新鮮な驚きを覚えたというのが率直な感想です。その上で、現在の学生の皆さんに二つのことを伝えたいと思いました。

第一に、「地頭」<sup>じあたま</sup>を鍛えてほしいということです。私は、1974年に法学部を卒業して就職しました。それ以来のビジネス経験を踏まえ、人材について思うことは、自分の頭で考え、それを自分の言葉で語る人材、すなわち自律の精神を持った人材が大切だということです。「地頭」という言葉があります。ご存知の方も多いと思いますが、それは、たとえ経験したことのない状況や勉強したことのない問題に遭遇しても、自分なりに考えきちんに対応できるという、人間の素の能力といった意味であります。ア prioriに正解が分からないことが多い実社会においては、この地頭の良さが極めて重要になってきます。特に現在のように環境変化が激しい時代にあっては、前例のない事象が生起するのが当たり前になってきており、このような状況においては、正解を既成のフォルダーの中から探してくる能力ではなく、そもそも何が本質的な問題なのかをシンプルな形で問う力が大切です。「地頭」を以上のように理解した上で申し上げれば、これを鍛えるための特権を大学生は持っていると思います。まず時間的に余裕があるこ



とであり、次に勉強やスポーツ或いはボランティア等を含むあらゆる活動の領域に制約がないということです。人生の他の時期と比べ、大学生には圧倒的な時間の自由度がありますが、その時間を使って、何に興味を持ち、どこまで深く勉強するかは全て本人次第で決められることです。授業に出て講義を受けるだけではなく、自らの関心の赴くところに従い、思考と活動の領域を大いに広げることにより、自分の眼と言葉と考えが鍛えられます。その中で自らの仮説や問題意識を設定し、様々なデータを収集した上で、それを有意な情報に仕立て上げ、自らの判断や行動につなげていく、という自律のサイクルを構築していくことが大切です。

第二に、視野を自分の身の回りや日本国内だけではなく、世界に広げてほしいということでもあります。私は、米国に留学と勤務で2回、英国には駐在勤務で1回と、海外経験をしてきましたが、その都度感じたのは、世界の価値観や方向性を知らずに、日本国内のことは正しく判断できないということです。世界で何が生起し、世界の人々が何に関心を持ち、どう考えているかということに、日本人はもっと鋭敏でなければなりません。そしてこの役割・期待を果たしうるのは、最高学府である京都大学の皆さん一人ひとりに他なりません。日本は現在、閉塞感に覆い尽くされていると、最近よく言われますが、政治・経済といった表層での閉塞感の根本には、今後日本が国家として進むべき道筋を日本国民が見出せないでいる、すなわち、日本にとっての新たな価値観を築けずにいるからではないでしょうか。この状況を打開するのは容易ではありませんが、日本の内側のみで解を模索するのではなく、世界の大きな潮流・枠組みの中で、かつ世界の若い世代のアスピレーションを感じつつ、改めて日本を見つめなおすことが、手がかりになるのではないかと思うのであります。情報通信技術や交通が飛躍的に発達した現在、海外からの情報入手や、交流の手段は幾らでもあるはずです。日本のリーダーとしての活躍が期待される京都大学の学生諸君には、世界を視野に入れた日本の新しい姿の創造に向けて、力強いエンジンの役割を是非果たしていただきたいと思います。

授業において基礎的な事柄を体系的に学ぶことは、学生にとって必須であります。しかし教室から一步踏み出して、自ら見出し掴み取る何物かを学内外に求めるのも、大学生にとって極めて重要な修練であろうと思うのです。

(つかもと たかし 株式会社みずほ銀行取締役頭取 昭和49年法学部卒業)

## 随想

## 飛躍のとき

名誉教授 森澤 眞輔

私は、平成22年3月に定年退職を迎えました。昭和40年に工学部に入学以来、途切れることなく京都大学でお世話になった生え抜き組の一員です。尤も、最近では、純粹培養組と呼ばれることの方が多くなってきました。人生の大半が京都大学と共にあり、この関係はもう少し続きそうです。



在職中は、工学部・工学研究科において、環境の微量汚染がヒトやヒト以外の生物に及ぼす悪影響を評価し管理する方法を開発することに努めました。必要なことと興味を持てることとを一致させることをめざし、社会が現に必要としていること、いずれ必要になることに研究課題を設定しました。講義室や研究室での学生諸君との関わりの多くは一方的な「教育」ということばで括られるのが通常ですが、多くの刺激や喜びを得ることができました。

昨今、教育研究を取り巻く用務は種類、量共に確実に増加を続けています。この傾向は、20世紀の末から21世紀の初頭にかけて、主として外部からの働きかけによって行われた大学院重点化や法人化を経てますます強くなってきた気がします。会議が増えた等の外から見えやすい変化の陰で、教育研究の質の維持に不可欠な条件の確保が困難になってきています。例えば、学生諸君と意見を交換し実験を共にする機会や研究のためのまとまった時間の確保がおぼつかない等、影響は次代を担う若い研究者に確実に及んでおり、研究を介する密接な教育を通じて若手研究者を育成することを困難にしつつあります。必要な人材は公募により獲得する戦術なのでしょうが、この戦術は、有用な人材を育成するメカニズムがどこかで機能していることが前提でしょう。

このような傾向は、大学のみでなく、社会の常になりつつあります。社内教育の余裕を失った産業界は即戦力の養成を教育界に頼り、実用化のための研

究や投資効果を評価するタイムスパンをますます短くしています。とりわけ、この国と地球社会を支える人材である博士課程学生、博士学位を得た若い研究者の処遇を改善する必要があります。「好きな研究をするのだから」と、生涯所得の減少や不安定な生活を強いられている若手研究者を支援し、その活躍の場を拡大する必要があります。少なくとも、授業料の納付や生活費を得るためのアルバイトに貴重な時間を費やすことなく、研究に集中しえる環境を整えることができないでしょうか。重要な社会機能を個人の負担によって維持する体制を変えることが望まれます。

研究用機器・設備等の高騰に見合う経常経費の増加は見込めず、大学院レベルでの研究に要する経費の殆どが科学研究費補助金等の競争的外部資金によってまかなわれています。息の長い独自の研究を支えてきた国立大学校費、運営費交付金の多くは施設の維持管理や教育に注がれています。教育研究を取り巻く環境の大きな変化にも関わらず、大学人は寡黙に、基本的な枠組みを変えずにその変化によく耐えてきたといえます。しかし、大学はそれぞれの特色や担うべき機能を明確にし、他に頼るのではなく自らの努力によって、その基本的な枠組みを作り替えるべき時であると思われます。これまで担ってきた機能を維持するために、教育研究の持続的展開を支えるための変革に誇りをもって取り組むことが望まれます。社会の持続的発展に対する信頼を確かにし、将来に対する安心感を育むことは、既存のしくみの手直しでは困難かもしれません。言われ始めて久しいのですが、教育研究の場の魅力を取り戻すためにも、新しいシステムの構築が必要なのだと思います。

本年10月から、京都大学iPS細胞研究所において所長補佐業務を担当する機会をいただきました。今少し、生え抜き組の一員として貢献させていただこうと存じます。ご指導下さいますようお願い申し上げます。

(もりさわ しんすけ 平成22年退職 元工学研究科教授、専門は環境衛生工学)



## 洛書

## 数学研究の楽しみ

入谷 寛



私は数学を専門としている者であるが、数学とはどういう学問なのか時々考える。社会とのかかわりで言えば、数学は全ての自然科学を記述する言語であり、科学技術の根幹をなすと言えるであろう。しかし、少なくとも私のやっている「純粋」数学は実用のものになったりはしない気がする。もちろん将来役に立つ可能性はないとは言えない(いや大いにあるのかもしれない)が、私自身、役に立つことを目標にして研究しているわけではない。

では「純粋」数学は芸術などに近いのだろうか。しかしそうとも言えない。まず、数学は一般の人が結果だけを観賞して楽しむことができるものではない。現代の数学を理解するためにはその結果だけではなくて、そこに至る過程を学ばなければならない。それは膨大な時間がかかるものである。また、数学ではある主題について完全理解をしてみれば、当人にとってはつまらなくなってしまうこともある。例えば  $3 + 4 = 7$  を小学校で勉強した後はもう当たり前になるように。一旦完全に証明された古典の定理を見て、これは美しい定理だ、などと味わう楽しみがあることは確かだが、それはどちらかというと自己満足のような気がする。その点、芸術では昔の作曲家の曲であっても、演奏される毎に毎回違った新鮮な感動がある。こう考えると、数学はそれ以外の分野の人には何のためにやっているのか、そして何が面白いのか理解してもらいにくいかもしれない。「何のために」という問いに対する答えは留保し、ここでは数学の「何が面白いのか」について個人的な思いを書くことにする。

すでに述べたように、数学ではその結果だけを純粋に楽しむことはできない。とすれば、自ら数学を考えるという能動的な行為の中にこそ本当の面白さがあるのであろう。実際の研究においてはいろいろ

と小さな楽しみが見つかる。証明の方針が分かった時、うまく計算ができた時、欲しい結果の載っている文献を見つけた時、ある論文の結果が別の論文と関係していることが分かった時、等である。そういう小さな楽しみが一つでもあった日は私にとっては幸せな日となる。

めったにないことであるが、そういった小さな楽しみとは少し質の違う、もっと大きな面白さに出会うことがある。それはそれまでのものの見方から一気に視野が開け、大きな世界があることに気付くときである。これは必ずしも新しい定理を証明したということではないかも知れないが、その後の研究の方向に大きな影響を与える。もう5年ほど前のこと、クレパント解消予想と呼ばれる幾何学の予想について考えていた時、それが特異点理論を大域的に研究することと深く関係していることに気がついた。それは特に私が新しく考えるまでもなく、問題の性質からいって当然そうあるべきであり、以前に誰かにそう指摘されたとしても直ちに肯定したであろう(誰かからすでに聞いていたことを忘れていて思い出しただけなのかもしれない)。ただそういった視点の重要性をそのとき初めて認識したのである。これは個人的には大きな思想の変化であった。

やや話が脱線するが、このような「思想」(というほど大げさなものではないが)は各個人の体験の背景が違うこともあり、なかなか人と共有できないこともある。人と数学の話をしていて、全ての細部で話が通じあっているのに、何か大きなところでお互いに通じないときがある。定理の数学的内容については完全に同意があっても、その背後の意味を共有しあえないのである。数学は全て理詰めの学問ではあるが、背後の思想も時には重要なのであろうか。

さて、上で「大きな」楽しみは「小さな」楽しみと質的に違うと述べたけれども、どれも初等幾何学で補助線を見出す喜びにも似て、結局は単に強度の違いなのかも知れない。いずれにせよ、私にとって数学の研究は「小さな」補助線を引く連続である。

(いりたに ひろし 理学研究科准教授、専門は数学)

## 栄誉

## 柳田充弘名誉教授が文化勲章を受章

このたび、柳田充弘名誉教授が平成23年度文化勲章を受章され、11月3日(木)、皇居において親授式が行われた。

柳田充弘名誉教授は、昭和16年東京都生まれ、同39年東京大学理学部を卒業、同41年同大学院理学系研究科修士課程を修了、同博士課程に進学後、スイスのジュネーブ大学へ留学された。その後イタリア・ナポリの国際遺伝・生物物理研究所や米国メリーランド州立大学での勤務等を経て、昭和46年京都大学理学部助教授に就任された。昭和53年に同教授、平成11年には新設された大学院生命科学研究科教授となり、同13年からの2年間研究科長として活躍された。平成16年3月定年により退職され、京都大学名誉教授の称号を受けられるとともに、大学院生命科学研究科特任教授に就任(同23年3月まで)された。また、平成18年から沖縄科学技術研究基盤整備機構ユニット代表研究者も務められ、今なお現役の研究者として精力的に研究を行われている。

同名誉教授は、分子遺伝学・分子生理学の分野において、細胞分裂時の遺伝子情報伝達に中心的役割を担う染色体の分配機構および細胞周期の制御機構を解明するとともに、染色体分配制御因子を酵母か



らヒトに至るまでの生命現象の普遍的理解として示すなど優れた業績を挙げられた。

生命の遺伝物質DNAを担う構造体である染色体が、細胞分裂時にどのような機構によって娘細胞に均等に分離・分配されるかを解明することは、生物学において最重要な研究課題である。同名誉教授は、分裂酵母をモデル系として選び、細胞周期M期(細胞分裂時)に起こる姉妹染色分体の正確な分離・分配をもたらす複雑な過程を分子レベルで理解するための基盤を確立、また、技術面においても蛍光顕微鏡を用いた技術開発に努めるなど、同分野の発展に多大なる貢献をし、世界的に極めて高い評価を得ている。

これらの業績に対して、平成7年欧州分子生物学機構外国人会員、同12年英国王立協会外国人会員、同22年には英国外の研究者で初めての英国生物学会名誉フェローに選出された。さらに、平成12年東レ科学技術賞、同13年朝日賞、同14年上原賞、紫綬褒章、同15年恩賜賞・日本学士院賞をそれぞれ受賞、同16年には文化功労者として顕彰されている。

今回の文化勲章受章は、これまでの同名誉教授の一連の業績が評価されたものであり、大変喜ばしいことである。

(大学院生命科学研究科)

## 玉尾皓平名誉教授が文化功労者に選ばれる

このたび、玉尾皓平名誉教授が平成23年度文化功労者に選ばれ、11月4日(金)に東京都内で顕彰式が行われた。

玉尾皓平名誉教授は、昭和40年に京都大学工学部合成化学科



を卒業、同大学院工学研究科に進学、同45年4月に京都大学工学部助手に採用され、同61年同助教授となり、平成5年に化学研究所教授に昇任された。平成12年から同14年まで化学研究所長を務められ、同15年に附属元素科学国際研究センターを設立、センター長を務められた。また、工学研究科物質エネルギー



ギー化学専攻の協力講座を担当し後進研究者の育成に尽力され、研究と教育、大学の管理運営において多大な貢献をされた。平成17年の退職後、理化学研究所フロンティア研究システム長に就任され、同20年から同研究所基幹研究所長を務められている。同名誉教授は、この要職にありながら、機能性有機元素化学研究ユニットを率いて現在も研究の最前線で活躍されている。加えて、平成22年からは科学技術振興機構CREST研究「元素戦略を機軸とする物質・材料の革新的機能の創出」領域の研究統括も務められている。

同名誉教授は、「元素の本質的特性に着目した物質創製」を目指した元素科学研究を展開された。熊田 誠教授(当時)とニッケル触媒クロスカップリング反応「熊田－玉尾反応」を開発され、今日の物質創製に不可欠なクロスカップリング反応の発展の基盤を築かれた。加えて、有機ケイ素化合物を活用する革新的有機合成手法の開発、環状含ケイ素化合物シ

ロール類の簡便合成法の開発と電子輸送材料としての実用化、新奇有機ケイ素化合物「テトラシラシクロブタジエン」の合成に成功されるなど、有機金属化学および元素科学における多大な貢献をされた。これらの顕著な研究成果に加え、日本学術会議第20期、21期会員、文部科学省科学技術・学術政策局科学技術・学術審議会専門委員などを歴任され、学術研究の推進にも多大な寄与をされた。「一家に1枚周期表」を提唱、文部科学省による制作を主導し理科教育にも尽力された。

平成11年には日本化学会賞、同14年にはアメリカ化学会F. S. Kipping賞、同15年には朝日賞、同19年には日本学士院賞を受賞、同16年には紫綬褒章を受章されるなど数々の賞を受賞された。今回、これらの功績が日本文化の向上発達に対して特に顕著な貢献と認められ、文化功労者としての顕彰の榮譽に浴されたことは誠に喜ばしいことである。

(化学研究所)

## 伊藤邦武文学研究科教授、丸岡啓二理学研究科教授が紫綬褒章を受章

このたび、わが国学術の向上発展のため顕著な功績を挙げたことにより、伊藤邦武文学研究科教授、丸岡啓二理学研究科教授が11月3日(木)に紫綬褒章を受章されました。以下に両教授の略歴、業績等をご紹介します。

伊藤邦武教授は、昭和48年3月京都大学文学部を卒業、同53年3月同大学大学院文学研究科博士課程を単位取得退学、同55年6月スタンフォード大学大学院哲学科修士課程を修了、同60年3月に京都大学文学博士の学位を授与された。昭和56年4月京都大学文学部助手、同60年4月神戸大学文学部助教授、平成3年4月京都大学文学部助教授、同7年12月同教授を経て、同8年4月大学院文学研究科教授となり、今日に至っている。またこの



間、平成17年4月から同18年3月まで教育研究評議会評議員、同18年4月から同20年3月まで文学研究科長を務めた。

同教授は、アメリカ哲学史と現代哲学を専門とし、哲学史、現代分析的知識論の分野で研究を推進した。また、哲学、哲学史両分野の教育において次世代人材育成に尽力し、学部教育と大学院教育の両方に関して大きく貢献してきた。さらに、国内外の学会活動を通じて哲学研究の普及に努め、我が国と世界の哲学界との橋渡しの役割にも力を尽くした。

アメリカ哲学史研究の分野では、プラグマティズ

ムの創始者であるパースとジェイムズの哲学思想の解明に努め、その現代的意義を明らかにすると同時に、それぞれの哲学者の論文集の翻訳を通じてその思想の普及に努めた。また、これらの思想家たちは我が国における京都学派の形成期の運動とも連動しており、結果的にこのプラグマティズムの研究が日本と世界の哲学研究との繋がりに関する分析をも包含した。他方、現代知識論の分野では、不確実性を中核に据えた合理的推論、推測の論理について研究し、その形式的分析と同時に、自然科学分野での宇宙論における応用、社会科学分野での経済学における応用をめぐる具体的事例に即して研究し、その成

果を多数の著作によって公表してきた。これらの研究は、哲学研究の学際的応用の可能性を広く学界に示した。

同教授は、以上のような業績に基づいて、長年にわたり日本哲学会の理事を務め、関西哲学会委員長、日本科学哲学会編集委員長などの要職を務めると同時に、世界哲学会連合の中核組織である「国際哲学協会」の終身会員に選出されている。その著作活動によって、平成20年和辻哲郎文化賞を受賞した。このたびの紫綬褒章受章は誠に喜ばしいことである。

(大学院文学研究科)

丸岡啓二教授は、昭和51年京都大学工学部を卒業後、同大学院工学研究科を経て、同55年にハワイ大学大学院にてPh.D.を取得した。昭和55年7月名古屋大学工学部助手、同60年7月同講師、平成2年1月同助教授、同7年4月北海道大学大学院理学研究科教授、同12年4月より京都大学大学院理学研究科教授となり、今日に至っている。



同教授は、永年にわたって有機化学の教育・研究に努め、分子認識化学の概念を組み込んだ精密分子触媒の開発を行い、先駆的な研究業績を数多く挙げた。特に、平成10年から着手した「金属を用いない有機分子触媒の化学」いわゆる「有機触媒化学」は、今では国際的に大きな学問分野になっており、触媒的不斉合成に有用な「丸岡触媒®」を生み出す等、この新しい研究領域における国際的なパイオニアとして広く認知されている。その後、開発された「簡素化丸岡触媒®」は、学問的な価値のみならず実用性にも優れ、人工アミノ酸の大規模合成に有用な高性能有機触媒として医薬品分野で実用化されている。また、平成17年から同21年まで特定領域研究「炭素資

源の高度分子変換」の領域代表者、同21年から特別推進研究「高性能有機触媒プロジェクト」の研究代表者、同21年から独立行政法人日本学術振興会学術システム研究センター専門研究員を務めている。同教授は、独自の発想による幅広い研究を展開し、現在までに400報を超える原著論文や100編を超える総説・著書が出版され、精密有機合成化学研究における基礎科学の発展に多大な貢献をした。

これらの業績に対して、第35回日本化学会進歩賞(1986年)、第17回井上學術賞(2001年)、第34回市村學術賞(2002年)、有機合成化学協会賞(2004年)、名古屋シルバーメダル(2004年)、第5回グリーン・サステイナブル・ケミストリー賞(2006年)、文部科学大臣賞(2006年)、第59回日本化学会賞(2007年)、モレキュラー・キラリティー賞(2007年)、ノバルティス・レクチャーシップ賞(2007/2008年)、第63回中日文化賞(2010年)、アメリカ化学会Arthur C. Cope Scholar Award(2011年)、ドイツのHumboldt Senior Research Award(2011年)が授与された。今回の紫綬褒章受章は、以上のような功績が高く評価されたものである。

(大学院理学研究科)



## 話題

## 第2回京都大学風景写真コンテスト表彰式を開催

第6回京都大学ホームカミングデイのイベントの一つとして、今年で2回目となる京都大学風景写真コンテストの表彰式を10月27日(木)に行った。

現在、過去を問わず本学の見慣れた風景やあまり知られていない風景の中で伝えたいもの、心に残っているものを撮影した作品を教職員、学生およびOB・OGを対象に作品を公募したところ38点の応募があった。審査の結果、グランプリ1点、優秀賞3点、入賞12点および審査委員長特別賞1点を決定した。表彰式では、グランプリおよび優秀賞の受賞者に大西有三理事・副学長から記念品を授与した。

グランプリの他、審査委員長特別賞まで17点の作品は、11月4日(金)から11月30日(水)までの間、百

周年時計台記念館1階の京大サロンにて展示し、その後、東京オフィスに展示している。



受賞者および審査委員集合写真

## 受賞者一覧(敬称略)

賞 名	氏 名	所 属 等	題 名
グランプリ	江種里 榮子	工学研究科職員	「春風」
優 秀 賞	小林 徹	経済学部2回生	「雪降るプロムナード」
優 秀 賞	蔡 淞宇	工学研究科修士2回生	「あかつき」
優 秀 賞	浜岡 芽里	化学研究所職員	「グリーンカーテン」



グランプリ「春風」



優秀賞「雪降るプロムナード」



優秀賞「あかつき」



優秀賞「グリーンカーテン」

(渉外部)



## 学術情報メディアセンターシンポジウム「これからの大学 ICT マネジメントモデル」を開催

学術情報メディアセンターは、10月28日(金)、大学ICT推進協議会(会長：安浦寛人九州大学副学長)後援の下、基調講演者として、文化人類学者の福島真人東京大学大学院総合文化研究科教授および大規模eビジネス企業におけるICT(情報通信技術：Information Communication Technology)専門家の吉岡弘隆楽天株式会社技術理事を招き、大学におけるICTマネジメントに関するシンポジウムを百周年時計台記念館において開催、本学をはじめとする大学の教職員、企業等から約100名が参加した。

現在、大学におけるICTの利活用は、大学の経営戦略やコンプライアンスなどの社会的要請に沿ったトップダウンのアプローチと、現場の技術力、技術センス、プロジェクト牽引のリーダーシップなどに根ざしたボトムアップのアプローチの両面を意識し、限られた人的・物的資源を制約にマネジメントを考えなければならなくなっており、何らかの「マネジメントモデル」を持つことが必要になってきている。しかも、大学はそれぞれ同じ課題に直面しており、各大学が共有可能な「大学ICTマネジメントモデル」の必要性の問題提起を行うべく、本シンポジウムは企画された。

まず、福島氏は、人類学・社会学・組織論を背景にした組織観察の研究から、事故社会学の特徴である「事故の事後研究・組織と技術の矛盾・リスクの不可避性」を、高信頼性組



基調講演を行う福島氏

織研究からの知見である「組織的ヒエラルキーの柔軟構造・情報収集の重層性・執拗な組織学習」と対比しながら解説され、併せて、救急医療現場を対象にしたフィールド研究から見出されたリスク管理のための工夫である「医師指示確認表」や「リーダナース・システム」等について講演された。

一方、吉岡氏は、楽天のeビジネスを支える情報基盤のこれまでの進展について説明された後、ハッカー中心の企業文化を日本に根付かせるための



基調講演を行う吉岡氏

「ハッカーの世界観」や「オープンソースベースの技術イノベーションとそれを取り込むためのボトムアップな勉強会の興隆」等、今後の民間事業会社の競争力の源泉として期待

されるハッカー文化への思いが語られ、最後に「運用現場での価値創造が重要になる」との結論で締めくくられた。

後半は、梶田将司情報環境機構IT企画室教授の司会の下、美濃導彦情報環境機構長(センター教授)、喜多一センター教授(副センター長)および基調講演者2名がパネルディスカッションを行った。議論では、「大学・企業・医療現場の特性」や「大学と教員の関係のメタファーとしてのマンションや商店街」、「情報化による価値創造とは教員の自由な時間を生み出すこと」、「CIO(Chief Information Officer)の経営への参画は必須」など、フロアも交えた活発な議論が展開された。

基調講演者を囲んだシンポジウム終了後の懇親会も大いに盛り上がったことから、大学の枠を越えて共有可能な道具立てとしての「大学ICTマネジメントモデル」を探究するきっかけを提供できたのではないかと考えている。



パネルディスカッションの様子

(学術情報メディアセンター)

## 国際交流会館おうばく分館で消防訓練を実施

10月29日(土)、国際交流会館おうばく分館において、入居中の外国人研究者、留学生、会館主事および国際交流課担当者、さらに国際交流会館宇治分館の入居者や主事も駆け付け、約80名が参加して、消防法に基づく火災避難訓練を実施した。



最新鋭の化学消防車も出動した火災避難訓練の様子

午前10時からの訓練では、館内で火災が発生し火災報知機が発報したとの想定で、教職員や当直者が消防署への通報、館内非常放送、初期消火、避難誘導等手分けして機敏に行動し、8分後には入居者全員の避難と安全確認が完了した。自衛消防隊長である戸倉照雄国際担当部長から、参加者全員に対し災害発生時の心構えについて説明の後、宇治東消防班長より講評があり訓練は終了した。

その後、消火器を使った模擬消火訓練や屋内消火栓による放水体験を行い、会館主事の加納靖之助教から専門領域である地震の発生メカニズムや発生時の対応等について、外国人にも解り易い内容の講演が行われ、参加者は平素の防火・防災への心構えや認識を新たにした。

なお、国際交流会館の消防訓練は、みささぎ分館および修学院本館でも実施することとしている。

(研究国際部)

## 宇治キャンパスでリサイクルフェア・交流会を開催

外国人研究者・留学生に対する支援の一環として、11月1日(火)、宇治地区においてリサイクルフェアを開催した。宇治地区教職員等関係者から家庭に眠っている遊休品の提供を受け、無償で外国人研究者・留学生に提供している。

第6回目の開催となる今年は、昨年に引き続き、外国人研究者・留学生と宇治地区教職員との交流会を同時に開催した。

リサイクルフェア会場となった宇治おうばくプラザのハイブリッドスペースでは、関係者の協力により集まった350点近くの物品が並べられ、研究者、留学生や家族など100名を超える来場者があった。毎年大人気のこの催しは、午後1時30分の開場時には、受付に希望者が殺到するほどで、特に電化製品、冬に向けての毛布、子供用の雑貨、おもちゃや靴は、家族連れに喜ばれた。

リサイクルフェア会場の隣に準備された交流会会場では、リサイクルフェアで選んだ品物を囲んで、お茶を片手に参加者は楽しい歓談の時間を過ごした。

2時30分からは、交流会会場に宇治地区研究所の

所長も参加し、中島正愛防災研究所長の挨拶を皮切りに、時任宣博化学研究所長、尾形幸生エネルギー工学研究所長、受入れ教員の自己紹介があり、会場は和やかな雰囲気に包まれた。また、その後行われた電子レンジなどの人気の電化製品の抽選会で、会場は大いに盛り上がった。

宇治地区では、外国人研究者600名(年間)、外国人留学生100名程度が研究のために来訪、滞在しており、今後もこのような生活支援事業を続けていく予定である。



リサイクルフェア会場の様子

(宇治地区事務部)



## 北京交通大学一行が工学研究科を訪問

11月4日(金)、中国の北京交通大学から楊 慶山 土木建築工程学院副院長を代表とする一行が、吉田 昭仁東京工芸大学准教授の案内の下、工学研究科を訪問された。

一行は、まず小森 悟工学研究科長・副理事と懇談され、大学紹介や国際化の状況などについて、意見交換を行った。

懇談の後、一行は小森研究科長の案内でインテックセンターの無響室と風洞実験装置の説明を受けたほか、船井哲良記念講堂でノーベル賞およびフィールズ賞受賞者の展示等を見学された。

引き続いて土木系、環境系、建築系専攻が入居するCクラスターでG30プログラムについて説明を受けた後、化学系、電気系専攻が入居するAクラスターでは、建物の外部から見えないように実験装置・機器類のパイプやダクトを収納しているテクニカル

スリットを見学された。

当日は天気にも恵まれ、北京より10度も暖かい小春日和の中、一行は精力的に行程をこなし、帰路につかれた。



無響室の説明をする小森研究科長(左)と楊副院長

(大学院工学研究科)

## 「女子高生・車座フォーラム2011」を開催

京都大学がどんなところなのか、大学ではどんな勉強や研究をするのか、また、大学卒業後の進路にはどんなものがあるのかなど研究者や科学者の仕事を知ってもらうことを目的として、11月6日(日)に女性研究者支援センター主催の「女子高生・車座フォーラム2011」を開催した。フォーラムには、関西地域だけでなく関東地域からの参加者もあった。

鈴木晶子教授(社会連携事業WG主査)による司会進行のもと、はじめに稲葉カヨセンター長より開会の挨拶があった。そして、西山 伸大学文書館准教

授から「京都大学の歴史」について、淡路敏之理事・副学長から「京都大学の教育と現状」についての講演があった。講演に続いて、グループ討論の講師およびアシスタントの学生全員の自己紹介を行った。

昼食後、高校生はグループ討論会場に移動し、8グループに分かれて討論を行い、松本 紘総長も全グループの討論会に参加した。

高校生がグループ討論を行っている間、保護者はキャンパスツアーに出かけ、学内見学後、元公爵西園寺公望京都別邸の「清風荘」にて、学生サークル「心茶会」によるお茶会に参加した。

グループ討論の後には、再度全員が集まり、久家慶子准教授の司会により全体会を行った。まず、アシスタントの学生より各グループの討論内容について発表を行い、講師が高校生からの質問に答える形でまとめを行った。「将来、何になりたかったか」という質問が司会者よりなされ、講師の意外な回答に笑いが起こった。最後に鈴木教授の閉会の辞にて終了した。

(女性研究者支援センター)



松本総長も参加したグループ討論会の様子



## 経営管理大学院が「第4回サービス・イノベーション国際シンポジウム」を開催

経営管理大学院では、「サービス価値創造」にまつわる重要な話題をとりあげ、平成20年よりサービス・イノベーション国際シンポジウムを開催している。第4回目となる本年度は、11月19日(土)、百周年時計台記念館百周年記念ホールにて、「日本の高品質サービス～和のかたち・和のころ～」をテーマとして、日本ならではの高品質サービスのグローバル展開について、現状と課題ならびに今後の展開の可能性を討議した。

冒頭、小林潔司院長の挨拶では、日本のサービスがグローバル展開する姿をとらえていこうというねらいにおいて、まさしく国際を謳うにふさわしいシンポジウムにするという意気込みが述べられた。

基調講演では、臨済宗大本山南禅寺管長である中村文峰<sup>せいは</sup>老大師より、「松柏千年の青～岩手陸前海岸の松～」を主題に、今回掛軸に揮毫<sup>きごう</sup>いただいた「真実<sup>しんじつ</sup>不<sup>ふ</sup>虚<sup>こ</sup>」なども踏まえ、本来厳粛な面を持つ日本のもてなしに通じる話の数々が紹介された。

パネルディスカッションⅠは「京のおもてなし」と題し、パネリストとして小川流煎茶の小川後楽氏、香老舗松栄堂株式会社の畑<sup>こうろうほしょうえいどう</sup>正高氏、西陣くらしの美術館富田屋の田中峰子氏の3名を迎え、日置弘一郎教授のコーディネートにより、それぞれの世界観が存分に披露された。さながら、芳香が立ち込め、路地の奥からわらべ唄が聞こえてくるかのような座

談であった。

パネルディスカッションⅡは「和のサービスの国際化」と題し、パネリストには、グローバル展開している日本企業を代表する5社から、イオンディライトの堤<sup>つみ</sup>唯見氏、公文教育研究会の石川博史氏、資生堂の大亀雅彦氏、日本航空の二宮秀生氏、ユニクロの佐藤崇史氏を招いた。当大学院からは鴨志田<sup>鴨志田</sup>晃教授が6人目のパネリストとして参加し、若林直樹教授がコーディネータとして議論を進めた。日本の殻を破って世界へ打って出るときのそれぞれの企業、業態ならではの苦心や工夫が紹介され、日本的強みを推し進めてよい部分と、過信に陥っていないか再確認すべき部分などの議論があった。

結語では若林靖永副院長がシンポジウム全体を総括した後、おりしも来日中のブータン国王による感動的な演説である「日本国民の価値観や資質が何世紀もの歴史から生まれてきたものであり、そうした力を備えた日本には、非常に素晴らしい未来が待っていることでしょう」を引用して閉会した。

本シンポジウムには、多種多様な産業・学術分野から大勢の参加者が集まり、プログラムを通して熱心に聴講された。参加者からは、「よくぞこれだけのメンバーを集めた」、「もっともっと議論を聴いていたかった」など、好評を博した。



中村老大師による基調講演



パネルディスカッションⅡの様子

(経営管理大学院)

## 京都大学の講義を Apple「iTunes U」にて無料配信

本学で開講されている講義をグローバルに発信し、「生涯教育における自学自習」に寄与すべく、インターネット上で無料配信している京都大学 Open Course Ware (<http://ocw.kyoto-u.ac.jp/>) では、「京大iTunes U」を開設し、アクセス数の高い講義をダウンロードできるようになった。11月17日(木)から、本学で開講される正規授業、英語授業、最終講義、公開講座(京都大学シンポジウムシリーズ『大震災後を考える』など)の計86講義の公開をスタートした。

iTunes Store ([www.apple.com/jp/itunes](http://www.apple.com/jp/itunes)) 内の専用エリア「iTunes U」では、世界中の大学教育機関の講義、語学レッスン、実習、キャンパスツアーなど教育的なコンテンツを無料で配信している。iTunes Uを通して入手したコンテンツは、iTunes Storeで音楽を楽しむのと同じくらいの気軽さでアクセスすることができるようになる。

概要:<http://www.apple.com/jp/education/itunes-u/>

コンテンツのカテゴリーは、旬の「おすすめ」「英語講義」「最終講義」である。その中には、現在本学で行われている正規授業に加え、京都大学シンポジウムシリーズ『大震災後を考える』-安全・安心な輝ける国づくりを目指して-での講演や、その他にもノーベル物理学賞受賞者の益川敏英名誉教授による講義、留学生向け日本文学の英語講義、退職される教授の最終講義など、本学で日々開講される優れた講義の数々をビデオで視聴できる。86講義(今後、順次増加予定)を公開配信し、世界中の方々のより多様な学びに貢献することとしている。

京都大学 Open Course Wareでは、1000を超える講義ビデオと資料を公開してきた。今後さらに国際的に学問の門戸を開き、iTunes U上でもこれらの講義をより使いやすい形で、簡単にアクセスできるようにする予定である。

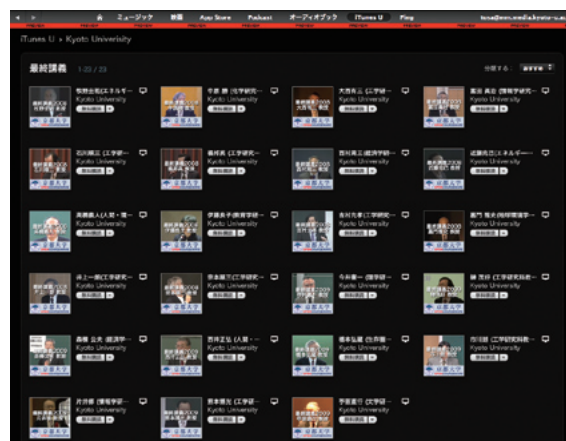
※iTunes は、米国 Apple Inc.の商標又は登録商標。



京大iTunes U トップページ



京大iTunes U 再生動画の例



京大iTunes U 最終講義映像のリスト

(情報環境機構)



## 社寺見学会を実施

11月12日(土)、平成23年度社寺見学会『秋の近江八幡と安土城跡を訪ねて』が行われ、99名が参加した。行程順に浄厳院(安土町)、安土城跡(同町)および近江八幡「町並みと水郷」(近江八幡市)を巡り、それぞれ専門分野の講師の解説に参加者は興味深く耳を傾け、晴天にも恵まれてとても有意義な一日を過ごした。

織田信長が再興建立し安土宗論が行われた浄厳院では、参加者一同は本堂を拝観し過ぎ去りし往時を偲んだ。安土城跡では、天下統一の野望を果たせず歴史に散った信長の夢の跡を散策した。また、近江八幡の町並みでは文化的景観を堪能し、水郷巡りでは船にゆられて、西の湖の広大なヨシ原と湖畔の眺望を満喫した。

当日解説いただいた講師は次のとおり。

(歴史)西山良平 人間・環境学研究科教授  
(建築)山岸常人 工学研究科准教授  
(造園)森本幸裕 地球環境学堂教授  
(美術)根立研介 文学研究科教授



安土城跡伝秀吉邸跡にて解説の様子

(総務部)

## 訃報

このたび、<sup>すぎむらとしまさ</sup>杉村敏正名誉教授、<sup>うえの すえお</sup>上野季夫名誉教授、<sup>さわらぎ よしかず</sup>樫木義一名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に各名誉教授の略歴、業績等を紹介いたします。

### 杉村 敏正 名誉教授



杉村敏正先生は、9月13日逝去された。享年92。

先生は、昭和16年12月京都帝国大学法学部を卒業され、同年同月京都帝国大学法学部助手に採用され、同17年2月兵役につかれたが、同20年9月同助手に復帰され、同22年11月京都大学法学部助教授に昇任、同29年3月教授に就任され、行政法講座を担当された。昭和53年3月に退職され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和41年3月から同43年3月まで京都大学評議員として、同47年10月から同49年10月まで法学部長として、学内行政に尽力された。

本学退職後は、昭和54年から平成元年まで龍谷大学法学部教授を務められ、同元年から同8年まで宮崎産業経営大学法学部教授として同学部の創設、研究教育体制の整備充実に多大の貢献をされた。また、

日本公法学会理事などのほか4期にわたり日本学術会議会員を務められ広く学界の発展に寄与されるとともに、京都府収用委員会会長などのほか京都自治問題研究所所長を務められ、社会的にも貢献された。

先生は、わが国の行政法学界の第一人者として、法の支配の原理を中心に広い研究領域で多数の研究業績をあげられ、これらは「全訂行政法講義総論(上巻)」などの体系書や「法の支配と行政法」などの論文集に結実している。先生の学風は、日本国憲法の諸価値に基礎をおく新たな行政法理論の構築をめざし、基本的人権の擁護・発展の立場に立ちつつ、実証的な考察と透徹した論理に裏付けられた明晰な理論を探究するものであり、学界に広く影響を及ぼすとともに、その学風を慕う著名な研究者を多数育成され、この面でも学界の発展に大きな貢献をされた。

(大学院法学研究科)



上野 季夫 名誉教授

上野季夫先生は、10月19日逝去された。享年100。

先生は、昭和12年3月京都帝国大学理学部を卒業され、同大学院に入学、兵役の後、同21年2月理学部研究嘱託、同23年8月理学部講師、同25年2月助教授、同32年11月京都大学理学博士の学位を取得された。昭和34年10月京都大学理学部教授に就任、宇宙物理学宇宙物理学第一講座を担当され、同45年12月に停年をまたずに退職された。その後、昭和46年1月から同48年8月まで米国南カリフォルニア大学文理学部客員教授・同大学電気工学部教授を併任された。昭和48年10月から同62年3月まで金沢工業大学教授を務められ、また、同49年7月京都大学名誉教授の称号を授与された。

先生の在職された戦後直後から昭和45年頃までは、核融合反応に基づく恒星の構造・進化の計算や観測に直結する恒星大気の構造研究など、恒星物理学の研究が盛んであった。この中で、先生は恒星・惑星大気を支配する放射伝達の方程式の解を研究され、この方面で世界的権威の一人として数々の成果を挙げられた。在任後半から南カリフォルニア大学時代には、放射伝達方程式の2点境界値問題を初期値問題に変換する不変埋蔵法の発展に取り組まれた。金沢工業大学時代にはこれらの研究を活かされて、人工衛星写真における地球大気によるにじみを補正する、いわゆるリモートセンシングのグループを立ち上げ、地球環境問題に取り組まれた。また、天文・地球・工学研究分野で多くの優秀な人材を育てられ、大きな貢献をされた。

(大学院理学研究科)

榎木 義一 名誉教授

榎木義一先生は、10月22日逝去された。享年94。

先生は、昭和14年3月京都帝国大学工学部機械工学科を卒業され、同年4月旅順工科大学講師、兵役の後、同16年6月名古屋帝国大学理工学部助教授に任ぜられ、同22年1月京都帝国大学工学部助教授を経て、同24年1月京都大学工学博士の学位を取得、同25年10月京都大学工学部教授に昇任し、応用物理学科応用物理学第3講座を担当された。昭和34年4月数理工学科創設により数理工学第2講座(昭和35年制御理論講座に改称)を担当し、多数の優れた人材を育成された。また、昭和55年3月に京都大学を退職され京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和41年4月から同47年3月まで京都大学工学研究所長として、原子炉事故解析研究部門の新設など同研究所の発展・充実に努めるとともに、京都大学評議員として大学の行政にも貢献された。

本学退職後は、昭和55年4月から同62年3月まで京都産業大学教授(昭和58年4月から同62年3月ま

で同大学理学部長)として後進の育成に貢献された。昭和55年4月には(社)システム総合研究所を、平成16年4月にはNPOしなやかシステム工学研究所を設立され、ともに理事長として産業界と学界との連携に努力された。

先生は、非線形強制振動、レオロジー、古典制御理論、非線形制御系の統計学的研究、現代制御理論、システム科学という広範な分野で独創的かつ先駆的な成果を挙げられ、特に昭和34年の京都大学工学部数理工学科の創設に多大な尽力をされた。昭和44年からは日本学術会議会員として、国際自動制御連盟IFAC世界会議の日本誘致に尽力され、同53年同連盟会長に就任し、同56年にはIFAC京都会議を主催され、わが国のシステム制御分野の国際化に大きな貢献をされた。

また、日本自動制御協会、(社)計測自動制御学会、(社)日本国際学生技術研修協会などにおいて、会長、理事長等の要職を歴任された。これら一連の教育研究活動、学界活動により、昭和55年4月紫綬褒章、同63年4月勲二等瑞宝章を受けられた。

(大学院工学研究科)